



しま おか もとむ
島岡 要 先生

大学院医学系研究科 教授

将来研究者になることに興味をお持ちの学生さんや、研究者としての道を今まさに歩き始めた大学院生の皆さん、研究者としての心構えについて知っていますか？今のうちにしっかりとした考え方を身につけておきましょう！そのヒントが書かれている図書を、ご紹介します。



『研究者のための思考法 10のヒント：知的しなやかさで人生の壁を乗り越える』

＜羊土社, 2014.7＞
[所在] 図・展示棚 [請求記号] 407 / Sh 43

言葉にして表すことが難しい知識を、あえて文章化するチャレンジ

—この図書の執筆のきっかけを、教えてください。

三重大に来る前は、13年間ボストンのハーバード大学で研究と教育をしていました。ハーバードで大学院教育に携わるなかで学んだことは、アメリカでは研究者も若いうちから高い独立性が求められることです。自分で考えて、必要な資金を集めて、研究を実行する自主性と自立性が必要です。ハーバードの大学院教育が育

成を目指す人物象とは、独立して物事を考えることができる人、インディペンデントシンカー (Independent Thinker) なのです。しかし、インディペンデントシンカーを育てるための教科書はありませんでした。なぜなら、これは暗黙知だからです。自分の経験に加え、過去の様々な文献からの知見を動員しても、まとめて人に伝えることは簡単ではありません。その様な暗黙知を、あえて体系的に文章に表すというチャレンジを行ったのが、この本です。個人のひとりよがりな意見としてとどめるのではなく、心理学や社会学の重要な知見を援用し正統性を持たせ、読者が信頼できるアドバイスを書くことを意識しました。

10のヒントは、すべて繋がる

—先生は、この図書で10のヒントを書いていらっしゃいます。大学生にとって、あえて選ぶとすれば、10のうちどれが一番重要ですか？

この図書を通しての一番のメッセージは、5章の「知的しなやかさ」です。知的しなやかさは物事を多面的に考えることができる力のことでこれを中心にしてすべてが繋がります。

例えば、これからの学生生活で、皆さんは「好きなことを見つけて好きなことをやりなさい」と、大人「からいわれることがあるかもしれない」。また就職活動の時も、自己分析をして自分の目標を考えることになると思います。しかし知っておいて欲しいのは「大人」でさえも、自分の興味が持てる好きなことを見つけることができません。はぐくむずかだと思えます。大人は自分のことを棚に上げているかもしれないという相対的視点が大切です。

本当にやりたいことは、様々な学問を勉強し、様々なプロジェクトに真剣に取り組むというプロセスを経て、やっとつまずくとわかつてくるものです。性急さや結果を過度に重要視することで、かえって本来大切なことから遠ざかってしまうことがあります。やりたいことがわかるという結果ではなく、そこへのプロセスで培われる知的しなやかさを身に付けることが長期的には重要なのです。

失敗は、ある試みをして、それがうまくいかなかったということを学べる機会

—今後学生の皆さんは社会へ出て、失敗をしたり、努力しても報われず、評価が得られない「人生の壁」に出会うこともあるかもしれません。その際は、どのよう

に受け止めればよいのでしょうか？

他の国と比較しても、日本人は失敗を恐れる傾向が非常に強いと思います。恥をかくことを恐れます。しかし、失敗を失敗ととらえることに問題があるのです。何かを成し遂げようと思えば、挑戦しなければならず、挑戦すれば失敗を完全に避けて通ることはできません。失敗はある試みをして、それがうまくいかないということを学べる機会だととらえて欲しいです。成功か失敗かは、結果論にすぎません。成長するためには挑戦が絶対に必要です。失敗それ自体が問題なのではなく、失敗を恐れて新たな挑戦ができなくなるのが問題なのです。

大学の授業では、質問する練習を！

—三重大生へのメッセージをお願いします。

私は授業で学生に「大学の講義を、映画や演劇を鑑賞するような態度で受けてはいけない」と言っています。講義室へ来て、先生の話聞いて、ノートをとって、いい話を聞いたと鑑賞してはだめです。少しでも良いから先生やクラスメートに質問してください。質問するというのがは自分の無理解を曝すことで、恥であるという行為は誤解されることもあります。しかしこれは大きな間違いです。質問する、つまり問いを立てるとは、深い理解の上に成り立つ非常にハイレベルの知的行為であり、新たな価値の創出につながる社会的にも意味のある行動なのです。グローバルな世界で働く場合には、会議室で質問できないければ、付加価値を生み出すことができない。残念な人「と見なされます。大学の授業を、単に知識を効率的に得る場としてだけとらえるのではなく、質問をして付加価値を創出する練習をする場である」ととらえたい。教室で質問する練習を重ねれば、将来会議室で質問できる。価値を生み出す人「になることができるでしょう。

島岡 要先生 プロフィール

三重大学大学院医学系研究科教授。
大学卒業後、10年あまり臨床医として治療に従事。ハーバード大学への留学を機会として、臨床医から研究者へ転身。専門は血管生物学。免疫細胞が体内をパトロールする働きに関連する細胞接着分子インテグリンの制御メカニズムの研究、そして血管内皮細胞の固さ制御などメカノトランスダクションを研究している。